

# 太宰治著述一覽稿(Ⅵ)

——昭和十六年——

山内祥史

東京八景・文学界・新年号、第八卷第一号・昭和十六年一月一日発行・128頁

『東京八景』（実業之日本社、昭和十六年五月三日）に、全文収載された。

『姥捨』（ポリゴン書房、昭和二十二年六月十日）に、全文収載された。

『水仙』（文芸春秋選書4）（文芸春秋新社、昭和二十三年七月二十日）に、全文収載された。

『東京八景』（実業之日本社、昭和二十三年八月二十日）に、全文収載された。

『太宰治全集第六卷東京八景』（八雲書店、昭和二十三年十二月三十日）に、全文収載された。

〔同時代評〕 三戸武夫「文学界」（「三田文学」第十六卷第二号、「今月の雑誌」欄、昭和十六年二月一日）には、つぎのように記されている。

創作は三つとも相当な力作であり、これらを書かし得た編輯者にも敬意を表すべきであらう。／＼太宰治の「東京八景」は太宰が今月発表した三つのうち最もむづかしい素材のものであり、最も力感のこもったものであるが、こんな短かさで片づけられるものではないと云った不思議な速度感も感じさせられるものであるが、その不思議に感ぜられる前説と落ちとは、気落させられるものがあつた。前説と落ちの枝とは気落させられるものがある。年令だけが背延びしてゐる感じである。

山岸外史「太宰治について―新ハムレット及び東京八景―」（『文学界』第八卷第九号、「新著評論」欄、昭和十六年九月一日）には、つぎのように記されている。

別著『東京八景』中の同名の作品は、これ（註「新ハムレット」）に比較すると、平凡な形式だが、―また、時々、私的主観に堕している点があるやうだが、感覚は素直であつた。／もつと傑出したものを、太宰君に常に要求してゐる僕ではあるが、これは、とまれ、失敗したものではない。

宮田戊子「太宰治氏の『東京八景』其他」（『近代日本文学の分析』霞ヶ関書房、昭和十六年十一月十八日）には、つぎのように記されている。

太宰治氏の小説は、『駄込み訴へ』とか『走れメロス』とか、たび／＼雑誌で読んでゐて、その才気には感心したが、何か上／＼りがしてゐるやうでもの足りない感じがしないでもなかつた。ところが最近『文学界』に發表した『東京八景』なる作は、真実性があつたゝめに大へん身をいれて読むことが出来たのである。おそろくあの作は、太宰氏の自伝的なものにちがひない思ふと、その人間の輪廓もはつきりして来て、それから『文芸春秋』に發表された『服装について』を読んでも、大そう面白く読了することが出来た。作家と作品とが切り離すべからざるものであるのはこれでわかる。／＼ところで『東京八景』によると、太宰氏は東北の方の相当裕福な家に生れ、高等学校のとき、何といふことなしに赤の手伝ひをしたり、芸妓あがりのHなる女と同棲したりしたが、その頃は家から毎月学費をもらつてゐたにかゝはらず、学校へも行かず、運動の一翼と称する文学には、軽蔑しながら接してゐた。まったく無意志、無感動のニヒリズムだつた。何べんか警察に曳かれたが、ゆるされるとHはよく世話をした。これはHが気象が強く、母としてこのニヒルな主人公にのぞんでゐたからである。故郷の兄はさういふ弟にあきれながらも、毎月缺かさず金を送つて来た。／＼彼は一生懸命に『思ひ出』なる創作に没頭してゐた。それは自分の遺書がはりだと考へてゐた。自殺を企てたことも三度あり、盲腸を病んだり伝染病をやつたりして入院もした。麻醉剤

の利用から脳病院にも入った。どうしてかういふ心理状態に陥つたかといへば、「金持の子といふハンデキャップにやけくそを起し」たのであり、「不当に恵まれてゐるといふ、いやな恐怖感が、幼時から——卑屈にし、厭世的にし」てゐたのであつた。彼は「金持の子供は金持の子供らしく大地獄に落ちなければならぬといふ信仰」をもつてゐたが、これを精神分析の言葉をもつていふならば、金持の家に生れて、恵まれた生活をしてゐることに對する罪障感に脅かされてゐたものである。即ち彼の自我が超自我に苛責をうけてゐるのだが、意識的無意識的なかうした罪障感が、往々裕福な家の子弟を駆つて社会主義者たらしめたり、或はこの主人公のやうなニヒリストたらしめることは、すでに他の項で見て来たところである。／＼も一つ彼をニヒルに陥らしめてゐたものは、長兄の人格である。彼の父はすでに亡くなつてゐて、長兄があとをとつてゐた。即ちこの主人公にとつて、長兄は父代償だつたわけであるが、そのため彼はその長兄の厳しい人柄に畏敬してゐたと云つてゐるくらゐであつた。即ち彼は兄を畏敬するあまり、劣等感をもつてゐたことは、彼みづから「故郷の家の大きさ（こゝではその兄が家に象徴され、彼はこの二のものを同じものと見てゐる）にはにかんでゐたのだ。」と云つてゐるところで明らかである。金持の子は地獄に落ちなければならぬといふ罪障感と、家及び兄に對する劣等感（彼は彼をニヒルにしたが、そのための種々な悪業（學費のたゞとりや女との同棲等）は超自我の苛責を反復的ならしめるに十分だ。／＼ところが、その長兄が代議士に當選し、つゞいて選挙違反で起訴され、また考へてみると、自分は金持の子どころか、着て出るものさへない貧民であつた。故郷からの仕送りももう絶えようとしてをり、戸籍も分けられてゐたからである。かてゝ加へて自分の生家も、今は不仕合せのどん底にあつたといふことを意識した。そのためか身体は次第に健康をとりもどしたし、またどんな目にあつても生きなければならぬと考へるに至つたが、これを一言にしていへば、彼はニヒルと劣等感をまつたく克服しえたのである。その時彼はもう三十歳になつてゐたが、はじめて今までの遺書がはりにではなく、本氣に文筆生活を志して一生懸命に陋屋で作品を書き、さうして結婚もした。その妻の妹の夫が応召す

るとき、彼も見送りに行つたが、妹の夫の家は金持で、見送りのも皆立派な人ばかりだつたにかゝらず、彼は服装もだらしがなく、袴もはいてゐない貧乏文士だつたけれども、「人間のブライドの窮極の立脚点は、あれにもこれにも、死ぬほど苦しんだことがありますといひきれる自覚」だといふ信念（ナルチスムスによる劣等感の克服）をとりもどし、立派な親類たちの中で「あとは心配ないぞ！」と、おめず臆せず叫ぶことが出来たのである。この自信（ナルチスムス）は劣等感への反撥反動であることはいふまでもないが、前の劣等感が可なりはげしいものであつただけに、ナルチスムスも、それと同じ程度のものでその劣等感を充足しなければならぬ。それは妹の夫を見送りにゆくときのこの作者の描写におのづから出てゐるのは、甚だ興味あるところである。場所は芝の増上寺境内で、彼はそこに妹の夫のT部隊が来るのを待つてゐるが、なか／＼来ない。女学校の修学旅行の団体をのせた遊覧バスが幾台も目の前を通るので、立つてゐた彼は、はじめは平氣を装つて立つてゐたが、しまひにはポオズをつてみたりした。／＼バルザック像のやうにゆつたりと腕組みした。すると、私自身が、東京名所の一つになつてしまつたやうな氣さへして来たのである。（下略）／＼このナルチスムスは前の劣等感の充足にほかならぬが、女學生がその前を通るのに対してポーズをつけたり、それをバルザック像のやうに夢想したりして、このナルチスムスは頗る無邪氣であり、それを赤裸々に書いてゐるところに愛嬌があつて作者の面目を躍如とさせてゐる。

内海伸平「太宰治論」（『赤門文学』第二卷第九号、昭和十七年九月一日）には、つぎのように記されている。

傑作「東京八景」は彼の自叙伝風の私小説だが、その中に短い言葉だが政治文学に対する痛烈な批判がある。

「私は学校へは出なかつた。世人の最も恐怖してゐた日蔭の一翼と称する大袈裟な身振りの文学には、輕蔑を以て接してゐた。私はその一期間、純粹な政治家であつた。」そして思想に破れ、現実に叩かれ、生きてゆくすべてを失つた太宰は、「ばかな滅亡の民の一人として、死んで行かうと、覺悟を決めてゐた。時潮が私に振り当てた役割を、忠実に演じてやらうと思つた。必ず人に負けて、やるといふ悲しい卑屈な役割を。」（傍点筆者。）こゝから彼の

悲しい戯作が始まる。必ず人に負けてやるといふ此の宣言は、一種の敗北主義だと断定するのはやさしい。然し之は誰でもが容易に云へる言葉ではないのだ。恐るべき害毒を流すバチルスとなるだらう。之は芸術至上主義者にだけ許された言葉なのだ。それには「近代」の「原罪」を意識した人だけが持つ、特有の罪悪感がある。「滅び」の役割を以て登場した近代人の、神に対する告白だ。人間と人間との相互関係、乃至は社会と人間との関係ではなしに、神と人間との対決がこゝでは大切なのだ。こゝでは既に自我は神に反抗してゐる。そして彼は神に反抗するサタンなのだ。そして戯作とは、圧政者に対するプロテストメントであつた封建の世とは違ひ、こゝでは神にプロテストする近代精神のイロニイから生れた文芸なのだ。太宰がよく聖書を読んで、その中から引用したり、してゐるのは周知の事実だ。

〔付記〕 初出の「東京八景」には、「苦難の或るひとに贈る」というエピソードが付されている。なお、この小説は、昭和十五年七月三日から十二日までの間に、執筆されたものと推定される。

清貧譚・新潮・新年号、第三十八年第一号、通巻四百三十六号・昭和十六年一月一日発行・19～29頁・「創作特輯十三篇」欄

『千代女』（筑摩書房、昭和十六年八月二十五日）に、全文収載された。

『狂言の神（三島文庫14）』（三島書房、昭和二十二年八月三十日）に、全文収載された。

『太宰治全集第六巻東京八景』（八雲書店、昭和二十三年十二月三十日）に、全文収載された。

〔同時代評〕 無署名「新潮」（「三田文学」第十六巻第二号、「今月の雑誌」欄、昭和十六年二月一日）には、つぎのように記されている。

太宰治の「清貧譚」は十二篇中先づ自分の境地で小説にしてゐる点で、出来のいゝ作品である。かの聊齋志異の中の一編を太宰なりの空想に托して書いたものである。この方法は今にはじまつた事ではないが、作者自ら「この

やうな仕草が果して創作の本道であるかどうか」と云つてゐるやうに、正しく議論のあるところである。しかし、これに創作の看板を掛けても「あながち罪にはならないだらう」と片をつける前に、何故真に文学の本道と信ずるものへ真正面を切つてぶつかつて行かないのかと云ひたい。

H・A『新潮』『日本評論』作品評（『文芸』第九卷第二号、昭和十六年二月一日）には、つぎのように記されている。

太宰治「清貧譚」一通り太宰ごのみの清麗なコント。しかしまだやはり気障っぽい節が垣間見える。

石川達三「一月の小説（ハガキ回答）」（『新潮』第三十八年第二号、昭和十六年二月一日）には、つぎのように記されている。

「新潮」正月号、太宰君の「清貧譚」を面白く読みました。あまりにも現実的な作品ばかり読むせゐるか、かうした空想的な物語りがひどく自分の気持の息苦しさを救つてくれるやうに思はれました。文学はもう少しかういふ架空の世界にはいつて行つてもいいやうな気がします。

岩上順一「太宰治の一面」（『三田文学』第十六卷第二号、昭和十六年二月一日）には、つぎのように記されている。

このやうな嗟嘆の声を、私は「清貧譚」のなかにも聞きとり得られるかと思ふ。菊作りに熱中してゐる才之助は、菊を売つてはどうかとすめられ、「私は君を風流な高士とばかり思つてゐたが、いやこれは案外だ。おのれの愛する花を売つて米塩の資にする等とはもつての他です。菊を凌辱するとはこのことです。おのれの高い趣味を、金銭に換へるなどとは、ああ、けがらしい。」と軽蔑した。／＼軽蔑しながら、彼は菊によつて次第に富んで行つた。彼は芸術が売られ、それに依つて自己の清節がこれ以上に汚されるのに我慢がでなくなつた。「清い者は清く、濁れるものは濁つたまゝで暮して行くより他はない。あしたから、私はあの庭の隅に小屋を作つて、そこで清貧を

楽しみながら寝起きすることに致します」と彼は潔よく宣言する。ここまでは、そつくりそのまま「きりぎりす」である。しかし、問題はここで終らない。／才之助は「二晩そこで清貧を楽しんでゐたら、どうにも寒くて、たまらなくなつて来た。三晩目には、たうとう我が家の雨戸を軽く叩いたのである。」つまり、才之助は脆くも妥協したのだ。世俗の温い寢床に帰つたのだ。／「きりぎりす」の反俗精神が最後まで貫徹せられてゐることの快さは、ここでは惨めな妥協によつて汚されてしまつた。この事實は些細なことである。取り立てて騒ぐにも当らぬことかも知れぬ。しかし、私には、かねて薄々と危惧してゐたこの作家の危険が、一つの疑ひない事実となつて現はれて来た時の感じを押へることができないのだ。／私の仄かな危惧は、この作家が、人間性の暗黒を描く息苦しさへかねて、人間の美しさや愛情の純粹さを正面から歌ひ出した転換点で、彼の生活そのものに即せざる伝説口碑の中に素材を求めはじめた瞬間にはじまる。私は、「走れメロス」や「駆込み訴へ」や「きりぎりす」や「清貧譚」が、一方では、彼の内的苦悩の必然的な表現であることを認めると同時に、実にそれらのものが、彼の強い観念性と結びつき始めたことに危惧を感じないではゐられなかつた。彼は自己の観念をこれらの伝説口碑のなかに吹きこむことで新生面をひらいたが、同時にそのことが、彼の人間性追及を益々観念上の追及たらしめ、実生活上の妥協者たらしめる危険を増加したのではないかと思ふ。彼の実生活に於ける妥協は、やがていつしか、その作品の上で、「清貧譚」に於けるが如き、純粹性の敗北となつて現はれざるを得ないのだ。

佐渡・公論・新年號、第四卷第一號・昭和十六年一月一日發行・370～382頁・「小説」欄

『千代女』（筑摩書房、昭和十六年八月二十五日）に、全文収載された。

『姥捨』（ポリゴン書房、昭和二十二年六月十日）に、全文収載された。

『太宰治全集第六卷東京八景』（八雲書店、昭和二十三年十二月三十日）に、全文収載された。

〔同時代評〕 青野季吉「経堂稗記」（『文学界』第八卷第二号、昭和十六年二月一日）には、つぎのように記されてい

る。

「佐渡」（公論、太宰治）と云ふ短篇を、題材にひかれて、面白くよんだ。私は、近年、郷里を想ふ念が、しだいに細かになつて行き、ときどき「佐渡大観」を出しては拾ひ読みして古い記憶を思ひ浮べてゐる。「佐渡大観」はずつと前に佐渡教育会で編んだ本で、さまざまな叙述や調査などもあつて、便利ではあるが、型にはまつてゐて、温かさのないのが難だ。／佐渡を題材にした小説は、これまでも数少ないのであらうが、私はほとんど読んでゐない。或は案外よくないのかも知れない。尾崎紅葉の「煙霞療養」は、小説ではないが、小供のころに読んで、佐渡の風物をよくかいてあると思つた。しかしいま記憶を辿つて見ると、文章の巧妙以外、觀察の面白さなどは余り無かつたやうだ。題は忘れたが、田山花袋の旅行記に佐渡をかいたものがあつた。これは、いつたい佐渡の土を踏んでかいたのかと怪しまれるほど、実感の稀薄なものであつたのを憶えてゐる。／小説としては長塚節の「佐渡ヶ島」が、いちばん印象に残つてをり、いまもなつかしいものを感じる。この短篇は、「土」などとするでちがつて、絵のやうに美しい、その頃の所謂低徊趣味に拠つた作品で、小木と云ふ港町の、特殊な表情が細叙されてゐた。ああ云ふ系統の作品も、虚子の「俳諧師」や漱石の「二百十日」などを残しただけで、その後発展しなかつたが、いま読んで見たら、日本人的な豊かなものがこつそりと息づいてゐるのではないかとも思ふ。／太宰治氏の「佐渡」は、十一月中旬の、蕭々とした佐渡を描いてある点で、まづ私をとらへたが、ああ云ふ独語的な表現のなかに、その季節の佐渡がはつきりと写し出されてゐるのだから、見上げた才能だ。／「けふは秋晴れである。窓外の風景は、新潟地方と少しも変りは無かつた。植物の緑は、淡い。樹木は小さく、ひねくれてゐる。うすら寒い田舎道、娘さんたちは長い吊鐘マントを着て歩いてゐる。村々は、素知らぬ振りして、ちやつかり生活を営んでゐる。旅行者などを、てんで黙殺してゐる。佐渡は生活してゐます。一言にして語ればそれだ。なんの興も無い。」／これは佐渡で云ふ「国中」と云ふ平野を通つた時の感じで、それがどの辺か、私にはおよそ見当がつく。数年前の暮に、



私は義兄の骨を抱いて、風のやうに佐渡に帰つて来たが、佐渡に生れた私も、ほど同様な感じを抱いた。太宰氏の言葉でその時の感じが、胸ぐるしくなるまで生き返つて来た。小説は、ありがたく、恐ろしいものだ。／「佐渡には何も無い、あるべき筈はないといふ事は、なんば愚かな私にでも、わかつてゐた。けれども、来て見ないうちは、気がかりなのだ。見物の心理とは、そんなものではなからうか。大袈裟に飛躍すれば、この人生でさへも、そんなものだと言へるかも知れない。見てしまつた空虚、見なかつた焦燥不安、それだけの連続で、三十歳四十歳五十歳と、精一ぱいあくせく暮して、死ぬるのではなからうか。私は、もうそろそろ佐渡をあきらめた。……」／この衝き詰めた感懷が、私に強くひびいた。それが人生の真実かどうか、そんなことは、いま私には問題ではない。それよりもこの作者が、一途にこのやうな想念に嚙まれて生きてゐると云ふ人生の一事実が、私に強くひびいたのだ。

小坂松彦「文芸時評―二三の新進作家とその方法―」（「赤門文学」合同創刊号、昭和十六年十二月一日）には、つぎのように記されている。

最後になんといつてもこの作家の強味は体験の強味であらう。太宰治氏は動いてみせねばすまない作家としても浪漫主義者の面をもつてゐる。最近の短篇「佐渡」の中で、氏は詰らないのを承知で、佐渡へ出かけ行つた自分を書いてゐるが、こんな所にもこの作家のかういふ面が暗示されてゐるやうに思へるのである。

〔付記〕 初出本文末尾には「（作者後記。旅館、料亭の名前は、すべて變名を用ゐた。）」とある。

ろまん燈籠／（その二）・婦人画報・新年特大号、第四百四十三号・昭和十六年一月一日発行・186～192頁・「小説」欄

翻印状況については、「連載ろまん燈籠／その一」の項を参照のこと。

〔同時代評〕 「連載ろまん燈籠／その一」の項を参照のこと。

〔付記〕 目次には「ろまん燈籠（Ⅱ）」とある。絵・伊勢正義。

みみづく通信・知性・一月号、第四卷第一号・昭和十六年一月一日発行・88～95頁・「小説」欄

『千代女』（筑摩書房、昭和十六年八月二十五日）に、全文収載された。

『姥捨』（ポリゴン書房、昭和二十二年六月十日）に、全文収載された。

『太宰治全集第六巻東京八景』（八雲書店、昭和二十三年十二月三十日）に、全文収載された。

〔同時代評〕（A）「知性」（『三田文学』第十六巻第二号、「今月の雑誌」欄、昭和十六年二月一日）には、つぎのように記されている。

創作は、太宰治、小山いと子、中村地平、伊藤整、岩倉政治、の四つの小説と、久保田万太郎の戯曲とである。／その内、中村の「長耳国漂流記」伊藤の「得能五郎の生活と意見」岩倉の「新き道義」は連載物である。長篇小説を中途から読むのが嫌だと言ふのではないが、それは共々迷惑なこと。従つて短篇小説は太宰治の「みみづく通信」と小山いと子の「墓標」であるが、この二篇、共に二番せんじのだしがらである。云つてみれば「みみづく通信」は、はにかみやの様でいけ図々しい作者らしき人物が新潟へ旅行してその高等学校で講演したり、高等学校の生徒とお酒をのむ話。勿論此の些々たる小説に、テーマがどうの、フィクションがどうのと云ふ氣は毛頭ないが、太宰昔日の面影さへも見えぬ。自虐の精神とか云ふものが新体制と共に消失することは御同慶だが、後が空つぽではどうにもなるまい。小山の「墓標」も又なかなかの心臓もの、女の小説家が新京へ行つて昔の男に会つたらいつて悪いと言ふのではないが、それにプラスがなくては小説にはなるまい。一番読めるのが久保田万太郎の「菰すゝき」では此の雑誌の存在価値が疑はれる。

無署名『千代女』（小説集）太宰治著」（『三田文学』第十六巻第十一号、昭和十六年十一月一日）については、「千代女」の項を参照のこと。

〔付記〕 初出本文末尾には「十一月十六日夜半。」とある。

弱者の糧・日本映画・新年号、第六巻第一号・昭和十六年一月一日発行・43～44頁・「局外批評」欄

『薄明』（新紀元社、昭和二十一年十一月二十日）に、「隨筆一束」の総題の下に全文収載された。

『太宰治随想集』（若草書房、昭和二十三年三月二十一日）に、全文収載された。

『太宰治全集第十六巻もの思ふ葦（近代文庫23）』（創芸社、昭和二十七年七月一日）に、全文収載された。

青森・月刊東奥・一月号、第三巻第一号・昭和十六年一月一日発行・81頁

『薄明』（新紀元社、昭和二十一年十一月二十日）に、「隨筆一束」の総題の下に全文収載された。

『太宰治随想集』（若草書房、昭和二十三年三月二十一日）に、全文収載された。

『太宰治全集第十六巻もの思ふ葦（近代文庫23）』（創芸社、昭和二十七年七月一日）に、全文収載された。

五所川原・西北新報・昭和十六年一月一日（？）発行

『薄明』（新紀元社、昭和二十一年十一月二十日）に、「隨筆一束」の総題の下に全文収載された。

『太宰治随想集』（若草書房、昭和二十三年三月二十一日）に、全文収載された。

『太宰治全集第十六巻もの思ふ葦（近代文庫23）』（創芸社、昭和二十七年七月一日）に、全文収載された。

〔付記〕 未確認。号数、発行日、所載面等は未詳である。

男女川と羽左・都新聞・一万九千八百八号・昭和十六年一月五日発行・1面・「文芸」欄の「大波小波」欄

『薄明』（新紀元社、昭和二十一年十一月二十日）に、「男女川と羽左衛門」と改題して、「隨筆一束」の総題の下

に全文収載された。

『太宰治随想集』（若草書房、昭和二十三年三月二十一日）に、全文収載された。

『太宰治全集第十六巻もの思ふ葦（近代文庫23）』（創芸社、昭和二十七年七月一日）に、全文収載された。

〔付記〕 「今年はどうな題材を」の課題に答えたもの。

服装に就いて・文芸春秋・二月号、第十九巻第二号・昭和十六年二月一日発行・330～340頁・「創作」欄

『千代女』（筑摩書房、昭和十六年八月二十五日）に、全文収載された。

『女神』（白文社、昭和二十二年十月五日）に、全文収載された。

『誰も知らぬ』（ロッテ出版社、昭和二十三年八月十五日）に、全文収載された。

『太宰治全集第六巻東京八景』（八雲書店、昭和二十三年十二月三十日）に、全文収載された。

〔同時代評〕 山岸外史「文芸時評」（『都新聞』昭和十六年一月）には、つぎのように記されている。

二月号文芸春秋『服装について』は太宰治氏の悲惨なる諧謔であつて、じつは、その諧謔さへ売品してゐるところもあるやうで、その点は彼の仕事としてはうらがなしいものである。むしろ、僕などはその悲惨なる諧謔に目を蔽ふ氣持をもつて読み始めたが、中途にして哄笑し、末尾でまた真面目になつた。そんな伏線の多い彼一流の悲鳴である。／僕など、じつは、解り過ぎ、これ以上時評として書く位ならば、会つて話をした方が早いから、この小品は、これ位にして置いて自分の方を放免したい。が、これ位斬新で作家ポーズのない悲惨な文人は、まだ、日本には生れなかつたと思ふ。所詮は、左翼文芸以来今日に到るまでの時代の自虐と心理過剰が産んだ心理苦文学のかわしい生粋の花であるだらう。ただ、氏も、いつかこの心境を離れ更に人間建設に入つてゆくものと信じてゐるが、これも、その経過の間に生れた一作と言ふべきであつたであらう。

無署名「文芸春秋」（『三田文学』第十六巻第三号、「今月の雑誌」欄、昭和十六年三月一日）には、つぎのように記されている。

太宰治の「服装に就いて」は面白いといへる。ある人によれば面白くない私小説だといふ。さうもいへるが、彼が、何か舌たらずながら、人生を見、それを批判してゐるのである。みづみづしい文章であるし、その角度は愛するに足るものといへる。／とにかく、この作家は、愛すべきものを持つてゐるのである。単に、文壇的といふよりも、文化批評的に。

石田英二郎「二月の小説―『文芸春秋』―」（『新潮』第三十八年第三号、昭和十六年三月一日）には、つぎのように記されている。

太宰治「服装に就いて」太宰の饒舌な自意識過剰なモノローグ。しかし、その自意識過剰の自己解剖の結果が、意義あるものをみつけ出してゐるとも見えない。

広瀬進「創作月評」（『文庫』第一卷第一号、昭和十六年三月一日）には、つぎのように記されている。

太宰治「服装に就いて」は物足りない。あまりに随筆的だ。随筆か小説かの問題からは離れるが、どちらとも区別のつけられない小説といふものには、多少の物足りなさは添ふものだと思ふ。要するに随筆にしても前（註）志賀直哉「早春の旅」をさす。）よりはの方がずっと心に応へた。心構へに深いものがあるからだ。

T・Y「『文芸春秋』『新潮』作品評」（『文芸』第九卷第三号、昭和十六年三月一日）には、つぎのように記されている。

太宰治「服装に就いて」自己の服装を語つて達者な話術を發揮してゐる。読んで楽しい短篇で一寸魅力がある。が耳ざりな口調の節々でこの舌芸未だしの感だ。何を語つても懺悔の美しさと醜さが滲み出てくる独自の響を立てた太宰に、最近の作品では何か浅墓な戯作者根性が顔を出してゐるのは取らぬ。謙譲を口にしても、それが戯作者めいた卑屈と聴えるのは、以前の彼を思ひ上つたやうなポーズに人の眼に映らせたのと同じく自身の感受性と才気への妙な自信が作用してゐるのではなからうか。技巧や才氣一方の側の作家でなくて精神の側の作家となるためには、まづ第一に、ちよいと気の利いた下げを洩らして引込む癖は止めた方がよい。

宮田戊子「太宰治氏の『東京八景』其他」（『近代日本文学の分析』霞ヶ関書房、昭和十六年十一月十八日）には、つぎのように記されている。

『服装について』は随筆的な作品であるが、やはり自分自身のことを書いてゐるものらしい。高等学校一年生の

とき服装に凝り、通人の服装をしておでん屋に行つたところ、おでん屋の姉さんに「兄さん東北でせう」と云はれてがつかりし、それから服装に凝るのをやめてしまひ、大学にゐる時、晴雨にかゝはらずゴム長をはき、しじうハ  
ンチングをかぶつて外へ出た。身の丈五尺六寸五分、その形の異様なさまを頭に描いて読者はまづをかしくなつて  
来る。故郷の母から時たま送つて来る衣類がまた十年も会はない母の選ぶものなので、いつも派手な着物ばかりで  
ある。大きな紺や桃を一杯染めてある浴衣を着てゐる姿に、友人はふき出してしまふ。その彼が十年間質屋に入れ  
ておいたセルが、赤縞だつたのが変色してゐる奴を着て、その服装ゆゑに友人を殴らねばならなくなつて、遂にの  
み屋の主人から酔っぱらひとしてその家を追ひ出される。こゝの処で作者が安宅の関の辨慶を引合ひに出してゐる  
のはやゝふざけてゐる感じだが、それだけにこの作は滑稽である。／＼この作品が微笑をもつて読まれるのは、作者  
の劣等感とナルチスミスが相互に波動状をなして表現されてゐるためであらう。彼は服装にまったく無頓着のやう  
に書いてゐるが、自分自身がその服装を絶えず注意してゐるので、全然服装にかまはないでゐるとは云へない。で、  
最後にのみ屋の主人に追ひ出される時も「つく／＼うらめしい気持であつた。服装が悪かつたのである。ちやんと  
した服装さへしてゐたならば、私は主人からも多少は人格を認められ——」と後悔してゐるのである。だから「最  
高の誇りと最低の生活でとにかく生きて見たい」と云つて、それは矛盾した心理で、その矛盾の心理がをかしいの  
であり、全体が自分を戯画化してゐるところに劣等感があらはれてゐる。／＼今の此のむつかしい世の中に、何  
一つ積極的なお手伝ひも出来ず、文名さへも一向に挙げらず、十年一日の如く、ちびた下駄をはいて阿佐ヶ谷を徘徊  
してゐる。——私は永遠に敗者なのかも知れない。／＼人は自分より優位にある人の動静よりも、劣敗者のそれに何  
か会心なものを感じる。ましてそれが小説家太宰治であり、彼が自己を思ひきり卑下して描写してゐるにおいて、  
読者は思はず微笑を禁じえなくなるのは当然である。

犯しめせぬ罪を・宮崎諒詩集「竹槍隊」・赤塚書房・昭和十六年二月二十日発行・5／＼7頁

『太宰治全集第十六巻もの思ふ葦（近代文庫23）』（創芸社、昭和二十七年七月一日）に、全文収載された。

〔付記〕 初出の「目次」には「序文」、本文末尾には「（二月六日。）」とある。

連 載 ろまん燈籠／その三・婦人画報・三月号、第四百四十五号・昭和十六年三月一日発行・186頁・「創作」欄

翻印状況については、「連 載 ろまん燈籠／その一」の項を参照のこと。

〔同時代評〕 「連 載 ろまん燈籠／その一」の項を参照のこと。

〔付記〕 初出本文末尾には「（以下次号）」とある。絵・伊勢正義。目次には「ろまん燈籠（第三回）」とある。「編輯後記」には、「今月は創作を三篇得た。何れも新鋭なる作家の新鮮なる作品である。充分の御熱讀を乞ふ。」とある。

連 載 ろまん燈籠／（その四）・婦人画報・四月号、第四百四十六号・昭和十六年四月一日発行・194頁・「学芸・創作」欄

翻印状況については、「連 載 ろまん燈籠／その一」の項を参照のこと。

〔同時代評〕 「連 載 ろまん燈籠／その一」の項を参照のこと。

〔付記〕 伊勢正義。目次には「ろまん燈籠（第四回）」とある。

連 載 ろまん燈籠／その五・婦人画報・五月号、第四百四十七号・昭和十六年五月一日発行・184頁・「学芸・創作」欄

翻印状況については、「連 載 ろまん燈籠／その一」の項を参照のこと。

〔同時代評〕 「連 載 ろまん燈籠／その一」の項を参照のこと。

〔付記〕 絵・伊勢正義。目次には「ろまん燈籠」とある。

あとがき・東京八景・実業之日本社・昭和十六年五月三日発行・273頁

『東京八景』（実業之日本社、昭和二十三年八月二十日）に、全文収載された。

『太宰治全集第十巻』（筑摩書房、昭和三十一年七月二十日）に、全文収載された。

〔付記〕 初出本文末尾には「昭和十六年三月。」とある。

千代女・改造・六月号、第二十三卷第十一号・昭和十六年六月一日発行・創作37頁・「小説」欄

『千代女』（筑摩書房、昭和十六年八月二十五日）に、全文収載された。

『娼捨』（ポリゴン書房、昭和二十二年六月十日）に、全文収載された。

『女生徒』（青春の書12）（鎌倉文庫、昭和二十三年八月十五日）に、全文収載された。

『太宰治全集第六卷東京八景』（八雲書店、昭和二十三年十二月三十日）に、全文収載された。

〔同時代評〕 石田英二郎「六月の小説『改造』」（『新潮』第三十八年第七号、昭和十六年七月一日）には、つぎのように記されている。

太宰治「千代女」十二の時に叔父さんにすすめられて「青い鳥」に綴方を出して評判になつた和子といふ女の話。「煉瓦女工」の野沢富美子や、「綴方教室」の豊田正子を諷刺した才気煥発な小説。

無署名「改造」（『三田文学』第十六卷第七号、「今月の雑誌」欄、昭和十六年七月一日）には、つぎのように記されている。

太宰治の「千代女」は、豊田正子、野沢富美子を狙ふ一少女をテキストとして太宰流一流の世界が繰り拡げられてゐる。これなどは太宰を理解するに一番解り易い作品であらう。

無署名『千代女』（小説集）太宰治著（『三田文学』第十六卷第十号、「新刊巡礼」欄、昭和十六年十一月一日）には、つぎのように記されている。

近頃小説が面白くないと云はれる。僕はそう思ふ。しかし、僕の面白くなさと云ふのは一般の読者とは違ふ。僕はこの三年程の間毎月五六冊から十冊位の新刊小説本を読み続けて来たのであるから、これを味覚に例へれば、外米を遂に喰ひなれたみたいなので大抵美味で不味でもなくなつてゐるのであるから、標準にはならない。ただ、



さう云ふ僕に生の愉悅を感じせしめるものありとすればそれは相当のものであると信じてゐる。太宰治の短篇小説集「千代女」は相当のものである。もし、「新ハムレット」に失望した読者があるならばこの「千代女」がその分も取返してくれるであらう。と云つて「新ハムレット」がつまらないと云ふのではない。また、読者の失望も間違つてはゐない。あれは文壇人だけに同感されるだけの理由があるのである。あれは序文だけのものである。と云つては誇張になるが、そう誇張して云ふ必要がある程序文と本文は切り離して見られないところに文壇人にだけ通ずる感じがしみじみと出てゐるのである。ああ太宰よ頑張れ僕もやるぞと云ふ感じである。おそらく、今の文壇人にとつて日夜頭を離れないことは、俺は本当に仕事をした、俺の力はこれで一杯なんだ、と云ふ心から仕事をしたと云ふ安心を得たい願望であらう。「新ハムレット」はさう云ふ文壇人の心に通ふものが素直に表はれてゐるのである。／＼とところで短篇集「千代女」であるが、こゝに収められてゐる「みみづく通信」以下「ろまん燈籠」までの七篇はすべてこゝ一二年の間の近作を集めたものでそれぞれ評判を得たものであるが、一々作品に触れて行くやうな読み方を僕はしなかつたし、読者にもお奨めはしない。短篇集「千代女」として娯めたい。――僕はこゝで太宰治を未知の読者に太宰の特徴を紹介しやうと思つたのだがそれは止めにしよう。この作品集でもつとも感じたのは、外でもない小説の娯しき、虚構の美しさと云ふものであつた。僕は、読者に、ただこれは娯しい本ですよとお奨めすれば良いと思ひ返したのである。こゝには深刻なる事件と云ふものは内外ともない。あるのは、嘘、すなはち物語りと云ふものばかりである。こゝで僕等は「話し」と云ふものが如何に僕等を豊富にし、感情を美しくしてくれるかを知るのである。

高木卓、大井広介、坂口安吾、平野謙、佐々木基一、宮内寒彌「昭和十六年の文学を語る（座談会）」（『現代文学』第四卷第十号、昭和十六年十一月三十日）の一節「太宰治氏『新ハムレット』『千代女』」には、つぎのようにある。

大井 太宰治の「千代女」ですね。「きりぎりす」で非難される夫の中に作者自身を含めてゐたのと、綴方の天才少女といふ設定になぞらへた「千代女」は同巧異曲ですけれど、あがり是一段と手際いいが、あんまり楽にやれすぎてゐる。自己批判の苦しみといふやうなものが全然みうけられぬやうな、一種の型ができあがり、それを使ひ安樂にやつてゐるといふ。／平野 それは、さうですね。

〔付記〕「編輯後記」には、「石坂氏は材を旧史にとつて、野心的力作を寄せ、丹羽氏また従來の型を破つた精進の大作を執筆す。さらに太宰氏の好短篇を得て今月号の創作欄はいつも讀みごたへあるもののみ。御清鑒を乞ふ。」とある。

ろまん燈籠／その六・婦人画報・六月特大号、第四百四十八号・昭和十六年六月一日発行・228～230頁・「学芸」欄

翻印状況については、「<sup>連</sup>載ろまん燈籠／その一」の項を参照のこと。

〔同時代評〕「<sup>連</sup>載ろまん燈籠／その一」の項を参照のこと。

〔付記〕 初出本文末尾には「(元)」とある。絵・伊勢正義。目次には「創作・ろまん燈籠」とある。なお、「編輯後記」には、「独自の魅力に好評であつた太宰氏の『ろまん燈籠』は今月で完了した」とある。

令嬢アユ・新女苑・六月号、第五卷第六号・昭和十六年六月一日発行・110～118頁・「短篇小説」欄

『千代女』(筑摩書房、昭和十六年八月二十五日)に、全文収載された。

『女神』(白文社、昭和二十二年十月五日)に、全文収載された。

『誰も知らぬ』(ロツテ出版社、昭和二十三年八月十五日)に、全文収載された。

『太宰治全集第六卷東京八景』(八雲書店、昭和二十三年十二月三十日)に、全文収載された。

〔付記〕 野間仁根畫。目次では「長篇小説」欄となつてゐるが、これは誤植と判断される。

新ハムレット―書下し長篇小説・文芸春秋・六月号、第十九卷第六号・昭和十六年六月一日発行・334頁・「出版春秋」

欄

拙稿「太宰治『新ハムレット』の『はしがき』原文について」(『近代文学 懇談会 会報』第二十八号、昭和三十九年六月十五日)に、全文紹介した。

拙著『太宰治(近代文学資料4)』(桜楓社、昭和四十五年六月五日)収載『新ハムレット』の『はしがき』原文について、全文紹介した。

〔付記〕 全集未収載。初出本文には、つぎのような前書が付されている。「厳選された良書だけをといふ建前から、ぼつりぼつりとしか出されなかつた文芸春秋社の出版も漸く軌道に乗つて来て、ここ一二ヶ月の間に相當活發な動きを見せることになるだらう。既に校了になつてゐるものも數種あるが、ここに大體の發行豫定順に著者の抱負を聞かせて頂かう。」なお、「出版春秋」欄は、一頁の文芸春秋社の出版紹介欄である。

容貌・博浪沙・六月号、第六卷第六号・昭和十六年六月五日発行・7頁

『薄明』(新紀元社、昭和二十一年十二月二十日)に、「隨筆一束」の総題の下に全文収載された。

『太宰治隨想集』(若草書房、昭和二十三年三月二十一日)に、全文収載された。

『太宰治全集第十六巻もの思ふ葦(近代文庫23)』(創芸社、昭和二十七年七月一日)に、全文収載された。

「晩年」と「女生徒」・文筆・夏季版・昭和十六年六月二十日発行・3〜4頁

『太宰治隨想集』(若草書房、昭和二十三年三月二十一日)に、全文収載された。

『太宰治全集第十六巻もの思ふ葦(近代文庫23)』(創芸社、昭和二十七年七月一日)に、全文収載された。

〔付記〕 初出誌「編輯後記」には、つぎのように記されている。

「文筆」夏季版をお送りします。本號には隨筆の趣きを變へ、著者の立場から「自著への御感想、または、思ひ出」を洩らして頂きました。これを讀者側から見る時、著者と作品理解への意義深き鍵たることを信じて疑ひませ

ん。御多忙中快く御執筆賜つた諸氏に厚く御禮申上げます。／（略）／永らく品切のため太宰氏ファンに御迷惑をお掛けしました氏の第一小説集「晩年」は今回、改版新装本となつて近日市場へ出ます。今しばらくお待ちください。同氏の「女生徒」も品切になつてゐましたが再版出来ました。

はしがき・新ハムレット・文芸春秋社・昭和十六年七月二日発行・1～4頁

『猿面冠者（現代文学選23）』（鎌倉文庫、昭和二十二年一月二十日）に、「初版序」の題で全文収載された。

『新ハムレット』（鎌倉文庫、昭和二十三年八月五日）に、「初版序」の題で全文収載された。

『太宰治全集第七卷新ハムレット』（八雲書店、昭和二十四年二月二十八日）に、「はしがき」の題で全文収載された。

〔同時代評〕「新ハムレット」の項を参照のこと。

〔付記〕初出本文末尾に「昭和十六年、初夏。」とある。

新ハムレット・新ハムレット・文芸春秋社・昭和十六年七月二日発行・5～259頁

『猿面冠者（現代文学選23）』（鎌倉文庫、昭和二十二年一月二十日）に、全文収載された。

『新ハムレット』（鎌倉文庫、昭和二十三年八月五日）に、全文収載された。

『太宰治全集第七卷新ハムレット』（八雲書店、昭和二十四年二月二十八日）に、全文収載された。

〔同時代評〕無署名「出版春秋」（「文芸春秋」第十九卷第七号、昭和十六年七月一日）には、つぎのように記されてゐる。

今度は、今迄比較的少かつた小説が一度に三つ刊行される。／窪川稲子氏の「四季の車」太宰治氏の「新ハムレット」櫻田常久氏の「平賀源内」である。（略）／「新ハムレット」は二十世紀の青年の旗手として自他共に許す鬼才太宰氏が、材を沙翁のハムレットに藉りて、不幸な家庭を描いた苦惱の書下し長篇小説である。ハムレットの

人物に材を藉りた小説では我々の周囲にも、志賀直哉氏、小林秀雄氏などの作があり、何れも種々な問題を含んだ傑作であるが、太宰氏のこれも新しい世代の問題作であらう。

山岸外史「太宰治について―新ハムレット及び東京八景」(「文学界」第八卷第九号、昭和十六年九月一日)には、つぎのように記されている。

太宰君の「新ハムレット」は、太宰君の最長の仕事にあたるといふことで、僕も前から、楽しみにしてゐた。いろ／＼、角度を変へて表現を企てる彼のことだから、また、一工夫あつたに違ひないといふスタイル上の興味もあつた。／＼(太宰君は、現在文壇では最も稀れな名スタイリストである)／＼ことに、この稿が未完成の頃、太宰君方を訪れた僕に、彼はその稿を絶対にみせなかつた。みせないどころか小机の上に綺麗に積み重ねてあつた百五十枚程の未定稿を覗くことさへ許さなかつた。『いけないよ。いけないよ』彼は周章でてこんな言方さへした。これは、大へん珍らしいことであつて、僕は、冗談に、『紙に触るぐらゐならいゝだらう。ちよつと一番上の原稿に触らせないか』／＼と言つたほど彼が貴重品扱いにしてゐた原稿だから、じつは、一冊になつた後で、僕は腕により、をかつて読んでみたいと考へてゐた。事実、かなりの精進と熱意をもつて彼はこの仕事を心がけてゐたやうである。／＼が、忌憚なく書くと、(僕は、ブックレビューなどのために、評言を切り下げ得るやうな人間でもないが)この仕事は、一箇の文芸作品として、必らずしも、成功してゐるものではなかつた。自由な会話に巧みでない太宰君が、最も会話を重要とする戯曲の形式を踏襲した点で、この作品は重大な失敗をまづやつてゐる。読破してゆくのにつれて、あまりに文章化されてゐる会話(自然と自由のない説話体)に、僕が窮屈な氣持を感じたことは確かであつて、その上、形式の繰り返へしが多いのである。そのために、この一作は、少々戯曲の形式に囚はれ過ぎた結果を示し、素直な感覺を欠いてゐた。／＼尤も、彼は、この点を充分に自覺してゐて、『いちどお読みになつただけでは、見落し易い心理の経緯もあるやうに思はれるが』また、『おひまのある読者だけ、なるべく再読してみて下さい』

などと、はしがきで断つてはゐるやうだが。——／けれども、形式としてこの作品は大へん失敗してゐるものである。戯曲といふこの形式を、或る家庭の不和の心理を説明する道具に使用してゐる点で失敗してゐるのである。／従つて、この点に関するかぎり、彼が用ひてゐるレーゼドラマといふ用語にもこの戯曲は入らないのであつて、形式の点では、太宰君が珍らしく大失敗してゐる一作である。／（この内容を盛る形式が、また、ドラマティックななにかであることも疑へないが。——また、要するに太宰君が全くドラマティストでない散文家であることを明示したやうにも思はれるが）／けれども、以上の批評にも係らず、僕が、この一冊で感心した点が二つある。／そのうちの一つは、『はしがき』の文章がたいへんに好いといふことである。／（これは皮肉ではなく、彼がこの仕事の方針と計画に対して、充分な自覚と意識とをもつてゐたことを、この『はしがき』で正確に裏書してゐるからである）／この点は、疎そかでないはしがきとして讃めたいと思ふ。更に重要な第二の点は、彼が、この仕事に於てなし果したいと考へてゐた或るものが（人間生活に於ては、如何に、その心理は相互に生々しい変遷と無限の発展を重ねてゐるものであるかといふ問題が）極めて野心的に純粹に盛り込まれてゐるといふことである。／この点は、作家（といふよりも芸術の人として）当然な心掛けではあるけれども、太宰治は、流石にその点を忘れてはゐないのである。／むしろ、しきりに、その点を追及し、その追及に努力し過ぎた点で、この作品が稍々、煩瑣に陥つてゐるのであつて、謂はば、彼は、あまりに説明しようとし過ぎて、例のやうに、形式を破壊することを忘れた。／（この点も、彼ははしがきで『心理の実験』を試みたものとして断つてはゐるやうだが）／僕は、ドラマといふ形式を、すこしばかり迂濶に採用した太宰君を警めたいと思つた。同時に、文芸に対して内燃してゐる彼の純粹な欲望の方は認めなければならぬとその両方を考へたのである。／さういふ意味に於て、この作品は、必らずしも成功してゐるものではないが、また、純粹度のないものではない。文壇に対して或る文芸的な示唆を与へたものだといふことは出来るであらう。／要するに、太宰治発展史中の一転機と試案をもつてゐる奇妙な作品で平凡な作品で

はない。／（尚、最後に一言、太宰君にむかつて言ひたいことは、この作品の中に一人もほとんどの悪人がゐないといふことは、心理を実験する戯曲としては、ことに不思議なことではないだらうか）／（中略）／かうして、この二冊を比較して、久しぶりに、太宰君の仕事を精考してみると、新作ハムレットは上述したやうに失敗してゐる作ではあるが、太宰治発展の途上にある『角度を変へた野心作』として、また、読者にとつてひとつの忘れられない意味を与へるものだと言つていいであらう。／とまれ、太宰治ぐらゐ、各作毎にスタイルを変へ角度を変へて、懸命に仕事に従つてゐる作者は少いといへるのであつて、その意味から言へば、文芸として試みられたこの『心理実験の新戯曲ハムレット』を精読して、強烈な批判を与へる批評家が続々現れてもいい筈だと思ふ。

板垣直子「太宰治論」（『新潮』第三十八年第十号、昭和十六年十月一日）には、つぎのように記されている。

新刊されたばかりの「新ハムレット」は、太宰氏としては、変つた努力である。詩のやうな小説ばかりかいてゐる人が、散文への苦闘を試みた一つであり、しかも最初であらう。シェークスピアの「ハムレット」の人物達に、太宰氏自身が、より人間的だと考へる心理付けをし、従つて異なる風になつてゐる。が、どうしてそんなことをしたのだらうと考へる。シェークスピアの原作における把握をあきたらなく考へたのだらうかと思つてみる。ハムレットのシェークスピア的把握を多少かへてもゐる。主人公は太宰の興味を引いたらしいが、太宰のハムレットには生氣がない。変なものだ。他の人々についても、私は太宰氏の仕事の意味を買ふことができない。シェークスピアの原作の方が自然である。王者や貴人であつて、同時に普通の人間をもとより十分につけてゐる。古典は、それが古典となつてゐる資格の故に当然立派であることに、人間達をその異なる客観性を十分に生かしながら描くことができたとみられてゐるシェークスピアに於いては一層さうである。太宰氏の与へてゐる解釈は「ハムレット」の中の重要な人物達を下品なものにしてゐるだけである。人間性をよりよく穿つといふ方向にはない。また、シェークスピアの原文のもつてゐる氣品と強さ——シェークスピアの偉さの一つを作る——も、「新ハムレット」ではみら

れない。形式についても不満がある。太宰氏はレーゼ・ドラマであると断つてゐるが、それでさへ、のべつに言葉が多すぎる。文章が詰つてゐて、重苦しい感じが多い。／＼太宰氏のやうなとくに若い作家は、古典の偉大さを知り、それを尊敬し、それ故にいたなら才能で冒瀆しない方がよい。このことはひとり太宰氏にのみいふことではない。ディレッタンのなすすべての作家に向つて云ひたいことである。「新ハムレット」は、上のやうな意味から、太宰氏の最もつまらぬ作品よりもつとつまらぬものだとものである。／＼もつと真剣に自分自身の創作をにかけて苦吟する方が好ましい。氏を發展させる方法である。氏の人氣は巷の浪漫派として人人に一服の煙草のやうな役割を果すことによつてゐる。それで止まつてはならぬであらう。それこそ巷の浪漫主義として終る危険が予想される。いふまでもなく、「新ハムレット」を試みたことも、或ひは真面目な動きの反映とみられるかもしれない。もしさうならば努力は続けられねばならない。／＼太宰氏の文学はこれからである。全くこれからだとは私は考へる。持前の才能と自ら求めてしてきた生活経験とをいいことにして、氣易い作品をかいてゆくことを、一番氏は警戒しなければならぬ。

赤木俊「太宰治著『新ハムレット』」(『現代文学』第四卷 第八号、昭和十六年九月二十五日)には、つぎのように記されている。

「ああ、可哀想だ。人間が可哀想だ。僕も、ホレーシヨも可哀想。ポロニーヤスも、オフキリヤも、叔父さんもお母さんも、みんな、みんな可哀想だ。」これは、「新ハムレット」のハムレットが洩らす言葉である。太宰的な俗物否定をのみ期待しながら、この作品を読むものにとつては少々意外の感じを抱かせるものがある。しかしいろんな意味でこの新しいハムレットこそ太宰の文学の本質をもつともよく物語つてくれるのだ。／＼この作品の基調をなすものは、二つの異質的な世界、作中の言葉を借りて言へば、「若い者」と「大人」の世界の交渉にあると見てよいだらう。もちろん前者はハムレットであるが、彼をとり巻く諸人物、すなはち叔父さんのクロージヤスをはじ



めとし、ハムレットの母親でありその夫の死後義弟にあたるクロージヤスと再婚したガートルード、侍従長のポロニーヤスなどは後者に属するのであり、さらにポロニーヤスの息子レヤチーズ、ハムレットの学友ホレーシヨー、恋人のオフィキヤなども部分的にはこれに含まれるとも言へるのである。／そしてこれら二つの世界の交渉的特質は、激しき相剋と闘争にあるといふよりは寧ろ成功しなかつた和解にあるのだ。二つの世界はたがひに調和をもとめてはゐるのだが、つひにそれは失敗に終るのである。「少年の感傷は純粹なものです。それを、わたしたちの生活に無理に同化させようとするのは、罪悪です。大事にしてやらなければいけません。わしたちこそ、この少年の純粹を学ばなければいけないのかも知れません。」これはクロージヤスの言葉。「僕は、やつぱり叔父さんを、たよりにしてゐるところもあるんだからね。」これはハムレットの述懐。しかしこれらの二つの言葉は同じ平面ではむすびつかなかつた。なぜだらう。誰が悪いのだらうか。誰でもない。双方が善意に立つてゐるのだ。しかも二つの善意は背を向けてしまふのである。ハムレットの言葉を想い出さう。「あの人たちだつて、悪い人ではない。いつも僕の事を、心配してくれてゐます。それは、わかつてゐる。あるひは深く愛してゐて下さるのかも知れないが、けれども、僕はいやなんだ。相談するのがいやなんだ。」かくして和解し難い二つの世界がはつきりと形をととのへてくる。悲劇の足音はもはや誰の耳にも明らかである。／一方では叔父クロージヤスが腹を立ててゐる。「わしたちのつらい立場を知りもせぬ癖に、わかい者たちは何かと輕薄な当てこすりやら、厭味やらを言つて、ひとの懸命の生きかたを遊戲の道具に使つてゐます。」この言葉の眞実性を誰も否定しないであらう。だがハムレットのつぎの批評も同じやうに眞実なのだ。「叔父さんは、現世の幸福を信じてゐるんだ。」／二つの善、二つの眞実の対立は、それを支へる、そして、それによつて支へられる二つの秩序の対立を意味してゐる。ハムレットの信じる秩序と叔父の属する秩序とははじめから無縁のものであつたのだ。一方が理想を、他方が現實を、それぞれ高しとするやうな内部構造をもつた二つの秩序が、融和しがたいものであるのは自然であらう。それはそれで良いとしても茲

にひとつの疑ひが起きてくる。なぜ二つの世界が天地を轟かして激しく噛み合ひ格闘しないのであるか。なぜ作者はハムレットとともに叔父クロージヤスによつて代表されるやうな俗物世界の転覆を企てようとしないのであるか。／＼すくなくとも過去数年の太宰の作品のどのひとつにも漲つてゐた筈の反俗物精神は、この作品のいつたい何処に見られるのであらうか。もしハムレットが若者の純粹をかたく信じてゐることができたとしたならば、どうしてそれを徹底的に貫かないのであらうか。対立する他を滅ばさずば已まない激しい自己貫徹の意欲は全く姿を見せることがない。これは要するに自己への不信を示すものである。まづ自己を激しく信ずることなくしては、他を信じたり、理解したりすることができない筈だ。この作品の主人公をはじめとする諸々の人物がすべて善人であると評されるのは、必ずしも作者にとつては名譽あることではなからう。つねに相手の立場に理解あるかの如き言辭を吐く、この作品の諸人物はそのじつ自分すらも信じてゐないのである。そのやうな人間の心理実験をこそ企てたのである、と作者がいふならば、読者は稍々意地悪な眼を以て作品のうしろにあるものをも読みとらねばならない。／＼この心理実験の場合は、一言にして言へば、傍觀者のそれである。徹底的には、なにもものをも憎み得ず、それ故、なにもものをも愛し得ない中立せる人間こそ、作者の共感を頒つものである。そのやうな人間がいかにして生れたかは、青春の回想記である「東京八景」などにいくらか姿を見せてゐる。環境から中立して純粹をひたすら護ることはそれほど困難なことではない。「走れメロス」が寓話のなかに、「きりぎりす」が現実の片隅に保たれた純粹であつて、それがなまなましい複雑な現実のなかでも同じやうに貫き得るかどうか甚しく危惧されたところであつたが、それは「新ハムレット」において現実のものとなつた。これは太宰のいままでの作品にくらべると著しく複雑なる世界を取り扱つたものであるが、その故に以前の純粹な反俗物精神はそのままでは貫くことができなかった。原作「ハムレット」は彼を複雑なる關係のなかに導き入れはしたが、その複雑さは彼の独自の精神を弱めたのである。「若い者」と「大人」といふやうな年令的対立がしんの現実を処理し得ないのは当然であらう。そのやうなものに根拠

をもつ反俗物精神では、俗物世界の秩序を批判し破壊しきれないのは言ふまでもあるまい。それはたかだか「走れメロス」とか「きりぎりす」のやうな単一化され抽象化された世界においてだけしか成立することができない。そのやうな弱さを包んだ反俗物精神であつたからこそ、「新ハムレット」を人間葛藤のドラマとしてではなく、心理の実験として書き改めさせたものであらう。「新ハムレット」は太宰治といふ作家の限界がどこまであるかを最も明らかに見せてくれる作品であるが、それは同時に彼のこれまでの作品の特質をも語つてゐるといふ点において注目すべきものである。

元木国雄「新進作家論」(「文庫」第一巻第八号、昭和十六年十月一日)については、「女の決闘(中篇)／連載第一回」の項を参照のこと。

無署名『千代女』(小説集) 太宰治著(「三田文学」第十六卷第十一号、昭和十六年十一月一日)については、「千代女」の項を参照のこと。

宮内寒彌「文芸時評」(「現代文学」第四卷第九号、昭和十六年十月三十一日)には、つぎのように記されている。

ジョゼフ・フィリマンの「神まことを知り給ふ」は、まことにたのしい小説であつた。この小説は私といふデイヴィド・バーンズなる男とエーリヒ・ノイマンといふ二人の男が、或る図書館で交した微笑によつて知り合ひになり、やがて外へ出る。(略)／注意すべきは、／「ひとつ、その話を現代風に焼き直してみよう。もつと身近かな話になるかも知れない」／と、いふノイマンの言葉である。これは、現代文学の特性をまことに明快に衝いた言葉である。などといふよりも先づ、われわれの読む日本の小説にも、とりわけ新しいと定評される小説の中に、如何にノイマンがあるか、といふことは注意すべきである、と思ふ。／例へば手近かな例でいふと、太宰治氏の近作「新ハムレット」もやはりノイマン小説ではないか。即ち、焼き直しに、あの小説の面白さがあるのではないか。少く

とも、あの小説は「ひとつ、沙翁のハムレットといふお話を現代風に焼き直してみませう。もつと身近かな話になるかどうか、まあ聞いて下さい」といふ風な意図に始まつた小説とみてよいのではないかと思はれる。／そして、序であるが、太宰治氏は、色々な意味で、勿論よい意味で、焼き直しの妙手ではないかと私は思ふ。いちいち例は上げないが、氏の面白さも、現代風も、その中にノイマンが住んでゐることから来るのではないかと私は思ふのである。従つて板垣直子氏の「太宰治論」（新潮）は、何かとんちんかんに思はれたのだが。

諸氏「本年度の文学作品で好かれ悪かれ貴下の関心を惹いたものは何か？（アンケート）」（『現代文学』第四巻第十号、昭和十六年十一月三十日）には、つぎのような回答が見られる。「一、著者と題名 二、その理由」。

小山祐土／一、太宰治の「新ハムレット」その他真船豊の「来葉の頃」「夏かげ」「山参道」の諸作品。「新ハムレット」が戯曲形式なので、戯曲ばかりになりましたが、小説では頭に残つてゐるような作品がないのを残念に思ひます。／二、ほんものの小説の少ないなか、太宰治の「新ハムレット」は、物を読む事の楽しさを感じてゐる感じがして呉れました。この作家は私にはまことに有難い作家です。／赤木俊／一、徳永直の「風」と「はたらく歴史」。太宰治の諸作品、但し「新ハムレット」は除きます。／二、（略）／吉村公三郎／一、イ詩集一点鐘、三好達治ロ東京八景、千代女、太宰治／二、その理由、イ（略）ロ、昔からの太宰ファンで鼻につく程読み、事実現在多鼻についてゐますが、矢張りうれしい作家です。服装について、東京八景よく、新ハムレットはつまりません。

高木卓、大井広介、坂口安吾、平野謙、佐々木基一、宮内寒彌「昭和十六年の文学を語る（座談会）」（『現代文学』第四巻第十号、昭和十六年十一月三十日）には、つぎのように記されている。

高木 それぢや次は太宰治の「新ハムレット」へ移りますか。／大井 やりませう。／佐々木 志賀直哉の「クローディアスの日記」を思ひ出しましたよ。／平野 さう、さう。／宮内 文芸時評にも一寸書いたけれども、いゝ意味の焼き直しのうまい人ですね。／高木 新潮の「清貧譚」を見ましてもつくづく技巧のうまい人だと思ひま

した。／坂口 太宰はもとも好きな作家だが、今度の「ハムレット」はつまらんよ。もつと小説と云ふか、こしらへものと云ふか、それが欲しい。あれちや直接の内省ばかりで面白くない。僕の求めるのはもつとこしらへものなんだ。／平野 坂口さんも案外沢山読んどうるですね。／坂口 いや、これは……／井上 これも無理に読まされたのか……（笑声）／大井 しかし、あれはシエクスピアの「ハムレット」の新解釈みたいに云つて、古典の冒瀆呼ばゝりするのは見当違ひですよ。何ですかね、これは作者の自己対話です。所でその対話形態は、座談会と同様結論を突きつめず済ましてね。こゝに本があるから、いゝですか一寸読まして下さい……「何をひとりでおつゝ云つてゐるのです……君は馬鹿だ……ふざけるのもいゝ加減にしたまへ、戦争は冗談や遊戯ではないのだ、このデンマークで今不真面目なのは君だけだ」……それからまた……「氣が弱い、わしを助ける筈の人がこの大事の時に馬鹿な身勝手な振舞ひをしてくれた、わしが悪いのではない、あの人が弱かつたのだ、他の思惑に負けたのだ、氣の毒な。えゝつ、汚辱の中にゐながらも堪へ忍んで生きてゐる男もゐるのだ。死ぬ人はわがまゝだ。わしは死ぬ。生きてわしの宿命を全うするのだ。神は必ずやわしのやうな孤独の男を愛してくれる。ハムレット、腹の中では君以上に泣いてゐる男がゐます」と……／宮内 なか／＼声色がうまいや。（笑声）／大井 さういふやうに、生きぬく王に表象され、所謂ハムレット型の懷疑主義を圧倒して、存続の余地をなからしめてゐるですね。いゝですかね。最後のハムレットの「信じられない、僕の疑惑は僕が死ぬまで持ち続ける」といふやうな独白なんか、有つてなきが如き必然性の稀薄なもので、「僕はレヤチーズに負けた、一兵卒になりませう」といふ所で一段落が付いてゐる。あゝいふ独白を附け加へて、まだドン・キホーテ型に圧倒されつくしてゐないかのやうに装ふのが対話形態の陥穽ですよ。／坂口 それとは別でね、僕は太宰がいよいよ自分の書き易い方法を身に付けてきた感じがするんだ。とにかく自分の一番書き易い形式で書く。しかし文学としてそれでいゝかどうかが問題なんだ、ちやうど手紙の形式なんかさうだ。／宮内 しかし、序文で、今までにない新しい形式を出さうとしたと云つてゐる。それ

が今度の狙ひらしい……／大井 序文や後記は必しもあてにならない。／井上 そのくせ批評の時は序文や後記で揚足をとる。(笑声)／坂口 とにかく何だよ、新しいかどうかは知らんけれども、小説形式として戯曲を書くのは無意味だよ。それは君、絶対に無意味なんだ。むろん小説と思つて読んでも、あんな家族の葛藤なんか真船豊に較べるとずっとチャチだよ。／佐々木 しかし、真船は純粋な戯曲でせう。／坂口 いや、真船のものを戯曲形式の小説として扱つて比較して。／平野 それや真船のほうが上だね。／大井 平野さんは真船を買つてゐるから……わたしは大嫌ひさ、それに「新ハムレット」は会話体こそとつてゐるが、全然戯曲ぢやない。／高木 真船論はまた別に……／大井 しかし、太宰治がですよ。書き易い、自分にふさはしい形式をとるのが何故いけませんか。／平野 さうなんだ。つまりですね、その書き易い方法で書いてゐるのが僕はいかにも太宰らしいと思ふ……／高木 ですが、とかく書き易い形式で書くといージイになり易いのは事実だと思ひますね。さうすれば技術的には無難かも知れませんが、一つの方向に固定する、まあマンネリズムになる事が多いですね。さう私は自戒してゐますが……／坂口 太宰の場合は小説の形象化が不足してゐる。いきなり言葉、分析だ。小説にもつと欲しいものは人間と人間とを縫ひ合せ、その発展からくる関係、構成……さういふ思想を形象化したものが先づ最初にくるべきだ。日本の文学は、太宰の場合なんかを代表としてその形象化が不足で、安易なんだ。……高木さんなど先づ形象化を求めていらつしやるんぢやないですか。／高木 いえ、僕はあまり形象化をやつてゐませんが、形象化する前にやはり内容がなくてはいけませんね……しかし作家の素質として絵画的な要素とさうでない人とがあります。／大井 形象化といふことで、わたしは文学観が變つた……たとへば一定のカメラからのぞいた風で、これは充分に人關係が出来てゐないといふ見方は、それは一寸違ふんぢやないかね。つまり条件だけのもの、氣持だけのもの、さういふ面でのささへあひ、顔も形もなくてもいい。／坂口 僕もむろんそれを問題にしてゐるんだ。つまり氣持の關係や、出来事の形象化を問題にしてゐるわけだ。事実として出来事を構成してゐると、何と云つても読者に親近感が起

る。……日本の小説はもつと面白さを狙はねばらんと思ふ。／平野 太宰は面白さを狙つてゐると思ふね……／坂口 たとへば自分ならかうした——といふ小説を書くことは割合小説家として努力が足りないと思ふんだ。人間の可能性を利用して、その中で人間を動かし、可能性を試めるのが眞の生き方だよ。さうなると、やはり事件といふものが必要になつてくる。平野 しかし小林秀雄は云つとるですね、小説の面白さについて、小説を読む時、自分ならかうする、つまり他人の人生を生きている面白さだと云つてゐるけれども、さうすると坂口さんとは反対ぢやないかな。／坂口 同じだね。つまり可能性の中に人生をつくつてゐる。人間の可能性を出来るだけ利用して人生を築いてゆくことが小説だ。ドストイエフスキーなどもさうで、だから僕は客観性のある小説が好きなんだ。／平野 ドストイエフスキーはあまり客観的ぢやないが……（笑声）太宰治から少し外れるが、……人間の可能性を利用してその中で試めすことは正道だけれども、しかしそれが出来ないから、出来にくいから自分の周囲を選ぶ……つまり自分を主人公にして小説を書くといふこともある。／坂口 出来にくいが、それをやるのが小説ぢやありませんか。／平野 それは正にその通りだが……／井上 しかし、自分ならかうする、自分ならかうした、つまり、さういふ他人の人生を生きている面白さだと小林秀雄は云つてゐるけれども、それは志賀直哉が昔から云つてゐることだね。志賀直哉の小説は全部自分ならかうしたといふ小説だ。（小林氏の所論は直接知らない、前の平野氏の言葉を受けて発言した）井上／坂口 だから限界がある。たとへば北原武夫の場合、あれはやりたくてもやれないといふことはモラルリストの限界なんだ。……出来にくいといふことのために、それがいやなんだ。自分がやりたくてもやれないといふことが自己弁護になる、そのまゝ終つてしまふことがあるし、それがやはりモラルの限界になつてしまふ。やりたくてもやれないといふことがモラルリストの限界になる。それぢや小説家として意味をなさぬ。／高木 それぢや太宰氏はこの位……／平野 いや、さうすると坂口さんは太宰治の何処を一体買つとるですか。／坂口 うん、それは……／平野 つまりですね、太宰治といふ作家は所謂小説の形象化を放棄してゐる所から出発してゐる。そこ

を僕たちは買つとるですが、しかしあなたは小説の形象化を色々先刻から云つてゐますね、……すると太宰の何処を買ふですか。／坂口 それは太宰は文章家としてのカンと、やはり戯作者だといふ点……彼は戯作者稟質を持つ、僕はそこを買つてゐるのだが、さう云へば分ると思ふ……それが本當の小説家だ、モラリストといふのは好きぢやないんだ。／平野 戯作者とモラリストとの違は？／坂口 それは君、違ふぢやないですか。全然違ふんだ。……自分を主題にすると作家はモラリストになる外はない。所で作家は戯作者になつて、人間の可能性を使つて形象化してゆくことのはうが肝心なんぢやないか。北原君も、僕はモラリストを止めてもつと戯作者になつて貰ひたいんだ……／平野 しかし、結局「新ハムレット」は、もつと新しいものを期待したがあれは昔の太宰治に逆転してゐるんぢやないかね。／高木 宮内さん、何かひと言如何ですか。宮内 さあ、別に……／高木 井上さんは……／井上 僕は読んでゐないのです。……しかし去年ですかいつですか、あの「きりぎりす」などゝいふのは、僕はどうも人情作家だと思つたね。よく反俗精神なんて云ふけれども、僕には全然そんな気がしなかつた。よく書けてゐるが、しかしあれは何処が反俗かね……／佐々木 文壇の批評なんて甘つちよろいものだ。（小生にあらず——佐々木（小生である——井上））

小坂松彦「文芸時評——二三の新進作家とその方法——」（『赤門文学』第一巻第一号、昭和十六年十二月一日）には、つぎのように記されている。

太宰治氏の「新ハムレット」は相当の野心をもつて書かれた事が感ぜられる作品であるが、結果としては失敗作であつた。冒頭「はしがき」に著者自身註して「人物の名前と、だいたい環境だけを、沙翁の「ハムレット」から拝借して、一つの不幸な家庭を書いた。それ以上の、学問的、または政治的な意味は、みじんも無い。狭い、心理の実験である。過去の或る時代に於ける、一群の青年の、典型を書いた、とは言へるかも知れない。」と言つてゐる、その意図については相当の成功を修めてゐるけれども、又かういふ觀念文学を書かうとした太宰氏の大きさ



が上走りしないでしつくりと感ぜられるのであるけれども、結局太宰氏の従来の作品に見られた特色としての小説手法に対する破壊的な概念がこの作品を作品として失敗させてゐるやうに思はれる。／＼山岸外史氏は太宰氏を評して「その小説家のポーズがないこと」「小説家らしからぬこと」を指摘してゐるが、かういふ作品を読んで、この言葉を考へ併せてみると、太宰氏の世界は今迄の近代小説といふものと同じジャンルの内で呼べないと思はれる程、両者の間の距離と、相違とを感ずるのである。バルザックやドストエフスキの小説流儀とは、それは何と異つたものとして眼に映することか。太宰氏がかういふ「ハムレット」を仮りて特に自分の実験を行つたといふ点は、非常に疑問となるのであつて、何故仮構をおしひろげて、いはゆる小説流儀のものを書かないのかと、之は正真不思議な感じなのである。言ひ過ぎるかも知れないことを許されるならば、かういふ態度に棲んでゐる作家に、それが興味とか真への凝り過ぎであるならばそれは困つたと言ふべきであり、それが自信のなさであるならば、之も又困つたと言ふべきやうに思ふのである。僕にとつて今大きな疑問は太宰治氏の最後の作品のすがたに他ならない。

重信常喜「情熱の喪失（文芸時評）」（『赤門文学』第一巻第二号、昭和十七年一月一日）については、「誰」の項を参照のこと。

小坂松彦「太宰治論覚書——『私』と散文精神について——」（『赤門文学』第二巻第六号、昭和十七年六月一日）については、「風の便り」の項を参照のこと。

内海伸平「太宰治論」（『赤門文学』第二巻第九号、昭和十七年九月一日）については、「駈込み訴へ」「風の便り」の項を参照のこと。

私の著作集・日本学芸新聞・第百十二号・昭和十六年七月十日発行・7面

『太宰治全集第十巻』（筑摩書房、昭和五十二年二月二十五日）に、全文収載された。

〔付記〕 振仮名付。初出本文末尾に「（昭和十六年六月二十八日）」とある。

山岸外史著「煉獄の表情」・新潮・八月号、第三十八年第八号、通巻四百四十三号・昭和十六年九月一日発行・116頁・「新刊月評」欄

拙稿「太宰治の新資料―「山岸外史著『煉獄の表情』について―」（『太宰治研究』第七号、昭和四十年九月十九日）に、全文紹介した。

〔付記〕「太宰治」の署名があるので、一応ここに掲げた。しかし、この稿は、山岸外史の全面的な加筆を受け、太宰治の文章ではなくなつたものだ、という。右記拙稿は、その事情を知らないままに、掲げたものであつた。

読み落した古典作品・現代文学・九月号、第四巻第七号・昭和十六年八月二十八日発行・93頁・「葉書回答」欄

拙稿「太宰治のアンケート回答」（『太宰治の人と芸術』第五号、昭和五十一年十一月二十日）に、全文紹介した。

『太宰治全集第十巻』（筑摩書房、昭和五十二年二月二十五日）に、全文収載された。

〔付記〕アンケート回答。「一、東西の古典中で読み落してゐる作品 二、読み落した理由」の質問に答えたもの。本文標題は、「<sup>葉書</sup>回答読み落した古典作品」となつてゐるが、表紙と目次とは、「<sup>ハガキ</sup>（回答）読み落した古典作品」と記

されている。なお、表紙と裏表紙とは、「昭和十六年八月十九日印刷納本 昭和十六年八月廿二日発行」とあり、奥付には「昭和十六年八月二十四日印刷納本／昭和十六年八月二十八日発行」とある。

世界的・早稲田大学新聞・二百廿六号・昭和十六年十月十五日発行・四頁・「学芸」欄

『太宰治全集第十六巻もの思ふ葦（近代文庫23）』（創芸社、昭和二十七年七月一日）に、全文収載された。

〔付記〕振仮名付。「随筆特輯」欄。

風の便り・文学界・十一月号、第八巻第十一号・昭和十六年十一月一日発行・134～147頁・「創作」欄

『風の便』（利根書房、昭和十七年四月十六日）に、全文収載された。

『道化の華』（実業之日本社、昭和二十二年二月二十日）に、全文収載された。

『太宰治全集第七卷新ハムレット』（八雲書店、昭和二十四年二月二十八日）に、全文収載された。

〔同時代評〕 西田次郎「三つの傑作——十一月の創作——」（『文庫』第一卷第十号、昭和十六年十二月一日）には、つぎのように記されている。

各雑誌とも先月あたりからおびたぐしい減頁で、従つて文芸欄も創作の頁が減つてをり、作家も長いものは二つにも三つにも割つて発表してゐる。そのために翌月にづくものが多くなつた事は読者の為には嬉しい事ではない。殊に一つの作品を鯉のブツ切りみたいに頭、胴、尾といふ風に分けて違ふ雑誌に発表するが如きはまことに迷惑でもあり興ざめすること甚しい。その代りに長くても一本立のつもりで載せてある雑誌を見ると嬉しくなる。／十一月の諸雑誌の創作欄を通読して、あまりに続き物やブツ切り物が多いので、それらについてはすべて読まなかつたが、太宰治氏の作品については、あまりに残念だから一言書かしてもらふ。「風の便り」（『文学界』）と「秋」（『文芸』）と「旅信」（『？』）の三篇で一つの小説をなしてゐるのだから三篇を連いで読んでくれといふのだが「旅信」がどこに発表してあるのかわからない。（どこへ発表したのか作者は明記してくれるべきだ）よつほど作者に問合せやうかと思つた。「風の便り」は最初の部分で「秋」は終りの部分、中央部が見当らないのだから困る。これは仲々よい小説で自分は非常におもしろく読んだので、胴体のないのがどうにも残念であつた。来月号の何処かへ出るのだらうが、いづれ発見したら纏めて読み改めて考へてみたいが、首と尾を読んだ限りでは仲々の佳篇である。

小坂松彦「太宰治論覚書——『私』と散文精神について——」（『赤門文学』第二卷第六号、昭和十七年六月一日）には、つぎのように記されている。

数日前に太宰治氏の小説集『風の便り』を購つて来て、その中の『風の便り』を先づ読んだ。私は、此の作家の作品は之迄殆んど全部読んでゐるが、何時も単行本になつてから纏めて読む事にして居るので、此の人にかういふ小説がある事を之迄知らなかつた。そして、私は今この作品を読んで、此の作家に対する従来の私の考へ方の甘さ

と、誤謬とを訂される所が多かつた。そして、所謂太宰ファンといふものが大抵、氏の作品のからくりを取り除けて、氏の本体に到り着く迄に、坐り心持のよい、途中の草原にあらをかいて仕舞ふといふ『事実』を多少の悲哀を伴つた苦笑をもつて考へた。私も、太宰氏の草原に、一頃は阿呆な夢を見たことがあるので、その頃紛れもなく私は馬鹿な『読者』といふものの一人であつたからである。／太宰治氏の『風の便り』は『走れメロス』や『女の決闘』を頂点とする、ある意味で順風に帆を挙げてゐた氏の創作史が、『新ハムレット』を書いたのを契機として行き詰りと反省期に達した事に対する徹底的自己整理である。そして、之は、氏の内面よりみた文学史にとつて、非常に重要な意義をもつべきものであることがわかる。／『風の便り』の十一頁の所で太宰治氏は次のやうに言つてゐる。／『私は批評家たちの分類に従ふと、自然主義的な私小説家といふ事になつて居ります。……私は「たしかな事」だけを書きたかつたのです。自分の掌で、明確に知覚したものだけを書いて置きたかつたのです。』此の言葉は、氏の作品上の虚構が演じてゐる役割りを規定するものであらう。私がさつき言つた草原とはこの虚構である。／氏にあつて、『私』は一切である。『私』を離れて、『一つの木や石』を書く散文精神は、氏には何の意味も持たない。それは機械の役割りを自ら果すことにしかならない。従つて氏は農民文学に対して次のやうに意見を述べる。／『私は農民の事を書いてゐる「作家」に不満があるのです。その作品の底に作家の一人間としての愛情、苦悩が少しも感ぜられません。作家の一人間としての苦悩が、幽かにでも感ぜられないやうな作品は、私にとつてなんの興味もござるません。』（八頁）氏に於ける『私』と散文精神との関係は之迄の引用から、明白に理解されるであらう。／さて、『私』精神から出発した太宰治氏は、しかも、その『私』の生活を真実を以て生きるだけでは満足できない。氏は何よりも『作家』である。『作家』であることのみに生を重点を置き、しかも、『私』に頼つたことの烈しい氏の宿命は悲しく苦しいものである。之について、私は一つのエピソードを借りて語らうとする。／氏の盟友、山岸外史氏が、再三語つて呉れた寓話に、『誠の玉』の話がある。氏がある時、道を歩いてゐて、路傍

で拾つた一つの玉があつた。それは光り輝いてゐて、それには『誠』といふ字が彫つてあつた。それから、氏は、何時でも、それを懷に入れて離さないでゐるといふのである。そして、『誠』さへあれば、嘘をつくことも、人を叱る事さへ出来るのだからね。いい玉ぢやないか。』と氏はこの話を結ぶのである。所で、その山岸氏と太宰氏とが最近或る温泉に行つた。そこには不動尊があつて、小さい瀧が流れてゐる、所謂、不動の瀧といふ所がある。そこへ散歩の途中立ち寄つた時、山岸氏は、その不動尊が一寸よく出来てゐるので見せようと思つて、振り返つて太宰氏を呼んだ。『おい、太宰、一寸来て見ないか。よい不動尊があるから。』すると、太宰治は、それに対して身をすくめて言つたといふのである。『僕は嫌だ。行かない。僕はこわい。』そこで山岸氏が太宰氏に向つて更に言つた。

『ねえ、太宰、不動さんといふものはね。火の中に立つてゐても平然として居るのだよ。かういへば判るだらう。』然し、矢張り太宰氏は如何にも怯さうに繰り返すのである。『判りません。僕は怯い。』そこで、山岸氏は、こいつ、本当に悪いことをして来た男だなと思つたさうである。この逸話<sup>エピソード</sup>は、両氏の特色を最も端的に表現してゐる。太宰氏についていへば、氏は『誠』の玉だけでは生きて行けない人なのである。氏がもし玉を懷いてゐると仮定するならば、それは、『誠』の字の上に重ねて、『作家』といふ字が彫られてゐるものであらう。『生きる事は、芸術であります。自然も芸術であります。さらに極言すれば、小説も芸術であります。』といふ太宰氏は、然しなお、モラリストではなく、ノヴェリストの宿命を持つた人である。／氏は二十世紀の文学を考へる。／『君の作品の中に十九世紀の完成を見附ける事は出来ても、二十世紀の眞実が、すこしも具現せられて居りません。二十世紀の眞実とは、言葉をかへて言へば、今日のロマンス、或ひは近代芸術といふ事になるのですが、それは君の作品の中にも未だはつきり具現せられて居りません。企図した人は、すべて無慙に失敗し、少し飛び上りさうになつては墜落し、世人には山師のやうに言はれ、まるでヴァインチの飛行機の如く嘲笑せられてゐるのです。けれども自分は信じてゐます。眞の近代芸術は、いつの日か、一群の天才たちに依つて必ず立派に創成せられる。それは未だ世界

に全く無かつたものだ。お手本から完全に解放せられて二十世紀の自然から堂々と湧出する芸術。それは必ず実現せられる。さうして自分は、その新しい芸術が、世界のどの国よりも、この日本の国に於て、最も見事に開花するのだと信じてゐる。君たちと君たちの後輩が、それを創るやうになるだらうと思つてゐる。』氏によれば、日本には明治以来お手本を離れた創作はなかつた。そして日本の近代文学の歴史は新らしい。そこで氏は続けて言ふのである。／『今では、外国の思想家も芸術家も、自分たちの行く路に就いて何一つ教へてはくれません。敗北を意識せず、自分の仕事に幽かながらも希望を感じて生きてゐるのは、いまは、世界中で日本の芸術家だけでも知れない。……すべてはこれからです。自分も死ぬまで小説を書いて行きます。……発表せずとも、書き残して置くつもりです。自分は明白に十九世紀の人間です。二十世紀の新しい芸術運動に参加する資格がありません。けれども、一粒の種子は確実に残して置きたい。こんな男もゐたといふ事を、はつきり書いて残して置きたい。』(四二頁—四四頁)／私は考へる。自然主義的な私小説家、此の批評は果して氏の特長を傷つけるものであらうか。時代は暗い陰影を稍もすれば、人の心に投じ勝ちであり、そして現在の文壇を支配してゐるのは、『私』精神の没落である。だが文学から『私』精神を取りさつたならば、果して何が残るであらうか。『文学作品の偉大さは、その作家の感傷の深さにあるのだよ。』とかつて、三鷹の居に氏をお訪ねした時、氏が語つて呉れた言葉を、燈火の前で私は今黙つて思ひ出して居る。稍もすれば緩む若い吾々の心を引き締めてくれるのは、矢張り、数多くない、『自ら』に真摯な人の存在と言葉とではないであらうか。

無署名『風の便り』(短篇集) 太宰治著「三田文学」第十七巻第七号、「新刊巡礼」欄、昭和十七年七月一日)には、つぎのように記されている。

太宰治もよく本を出す。一般読者から、この人の作品は一体どういふ風に評価されてゐるか、興味がある。とも角、丹羽や石川や阿部知二などの著作に比すれば、版を重ねることは、あまりないかも知れないが、確実に、一定

数の愛読者を擱んでゐることは疑ひない。本書には、新作風の便りをはじめ、新郎、誰、畜犬談、鷗と彼独特の私小説に、旧作猿面冠者の外律子と貞子、地球図の作品をあつめたもの。風の便りは、虚構の彷徨に一派の関連を有するかなり長い作品である。今更乍ら、作者の「虚構」の度胸に舌を巻かざるを得ない。決して高度の文学的価値とか鋭い文学精神の成果とかの讃辞を呈しようとは思はぬが、すくなくとも今日の夥しい小説集中にあつて、われわれの隙をねらつた短刀のひらめきを見せる点に於て一異彩たること、天晴れなものである。「鷗」は佳作である。云ひたいだけのことを（これは相当に興味ぶかいことなのだが）先づ遠慮なく云つてゐる。この告白の悲痛さは、むしろ、絶望的である。そして絶望的ならざるが爲に動かうとする気配の窺はれぬところに、われわれはひとつの矛盾をおぼえるが、とまれ、文学は哲学ではない。倫理ではない。作者のむき出しな姿に、読者はある安堵を与へられはしないか。まだ、この世に「真実」がのこされてゐるといふ安堵を。

内海伸平「太宰治論」（「赤門文学」第二卷第九号、昭和十七年九月一日）には、つぎのように記されている。

私は太宰文学に、その外貌が爛熟頹庸の相を示すが故に、戯作者的なものを感じ、而もその根底に、善蔵、磯多流の私小説の血脈を感じると云つたが、私の此の感受性の二重像はどこから生れて来るのであらうか。例へば「風の便り」の中に次のやうな感慨がある。『私は批評家達の分類に従ふと、自然主義的な私小説家となつてゐます。

（中略）それは私の小説の題材が、いつも私の身の周辺の茶飯事から採られてゐたので、そんな名前を貰つてゐるのです。私は、「たしかな事」だけを書きたかつたのです。自分の掌で明確に知覚したものだけを書いて置きたかつたのです。怒りも、悲しみも、地団駄踏んだ残念な思ひも。私は嘘を書かなかつた。私には手輕に歴史小説は書けません。』（十二頁）「私の今の仕事は、私にとつては、はじめての「私小説」で無い小説ですが、けれどもやつぱり他人の事は書けません。自分の周囲のことを書いてゐるのです。いま、での小説の型式に行き詰つて、うんざりしてやつとこんな冒険の新型式を試みる事になつたのです。」此の言葉は何も「新ハムレット」が古典に托して自己を

述べた私小説だ等と云ふのではない。嘘を書けない、確かな自分しか書けないと云ふその告白が面白いのだ。嘘が多いとか、真実性が無いとか、社会性がないとか云ふ如き批判は、あきめくらの言葉であらう。彼は烈しいまでの真実の探究者なのだ。そして、時代の真理苦の典型に迄高めようとして、それを執拗に表現せねばならぬと、のたうち廻つたのだ。当然真実の爆発は、形式を破壊した。真実への信念は、超個人的な要素であると思はれた文章をすら破壊した。いかなる時代の、いかなる巨匠達もそれに身をまかせ、或はそれに終始しなければならなかつた日本語に——彼はそれにすら孤独を感じた。彼の実事への表現は、こゝに迄至つた。そしてあの奇怪な太宰文学の言語が生れた。彼の言語は特殊な太宰治なる者の日本語である。偉大な詩人が、彼自身の独特な言葉をもつ以上に、彼の言語は排他的であり、独特であつた。而もあの渾沌時代の人間の心理苦は、太宰文学の裡に、舌を持つてゐる。そして後世の史家は、「近代」のインテリ層の血液の想ひ出は、太宰文学の中に生きてゐる、と云ふかも知れない。太宰の一切の表現は、「近代」だけのものである。／＼真実への探究が形式をぶちこわし、所謂形式の美と内容の真実とが不調和になると云ふ例は、我々が「古典時代」を失つてから、屢々経験して居り、日本の近代文学を貫く根深い迷妄となつてゐるが、彼はこの不調和をも調和とするやうな仕事を、あの独特な「話術」によつて果敢にもなし遂げた。その話術は、太宰の故郷津軽の独特のエロキューションを駆使することによつて生れたもので、彼は彼の内容にふさわしい形式美を創造する事に成功した。既に日本語の革新である。こゝで問題になるのは、何が真実かと云ふ事であらう。一般に太宰文学の面白さは虚構と真実との奇妙な交錯にあると云はれる。不真面目な、煮ても焼いても喰へない面をして、而も一番真面目なことを云つてゐる彼、或はその逆。「風の便り」にも云つてゐる。「私はどうしてかうなんでせう。不安と苦痛の窮極まで追ひつめられると、ふいと、ふざけた言葉が出るのです。臨終の人の枕もと等で、突然、卑猥な事を言つて、笑ひ転げたい衝動を感ずるのです。まじめなのです。気持は堪へられない位嚴肅にこはばつてゐる乍ら、ふいと、冗談を言ひ出すのです。」大体こゝいふ心理的な倒錯性、云



はゞ分別性と無分別性との兩極の交感状態は、我々近代人だけが持つ不幸なのであつて、分別の裏を搔いて、底抜けの無分別性を与へる、あの逆説的な表現も亦、うそと誠とは紙一重の人生感慨がそのまゝ告白されて面白い。之は亦太宰と云ふ近代の戯作者だけが持つ逆説的表現である。わづかな誇張、或ひはわづかな虚偽でも作品の中にあると、その作家の作品全部が虚偽であるかのやうな批判を受ける私小説家の中では之は亦異数の才能と云はねばならぬ。勿論このやうな奇怪な告白は、或ひは実人生の真に、まともに立ち向はない逃避的精神と非難されるかも知れない。私も亦、実はその非難の焦点にかへつて、彼に近代の戯作者的態度を見出したのだ。然しそれが悪いと誰が云へやう。考へて見れば、我々の周囲に一つとして「現実社会」と云ふ複雑怪奇な修羅場を、強烈冷酷な実事精神によつて描破した小説があらうか、西欧の近代小説に見られるやうな激しいリアリズムは、我が風土には育たない云つてよい。我々が伝統として持つてゐるのは、東洋風の自然觀賞の中に生れた、文人風の写生精神か、さもなければ、封建時代の被圧迫階級だつた町人風の消極的なプロテスト——陋巷に隠れ住む戯作者の韬晦精神であつた。むろん、社会を正面から文学作品の中でとり扱ふとする小説が無かつたわけではない。然しいつも、それは日本文芸の主流とはなり得なかつた。一ころ一世を風靡したマルクス主義文芸で、それは激しくとり入れられたけれども、結局その思想は滅びて、而もそれを奉じた文学者は全部生き残つた。太宰もその一人である。

〔付記〕 初出本文末尾の「作者附記。」には、つぎのように記されている。

これは物語の發端の部分でありますから、この次に「旅信」を読み、その次に「秋」をお讀みになると、一篇の意圖も、わかると思ひます。「旅信」も、「秋」も、他の雑誌に載つてゐる筈であります。

初収刊本における「風の便り」の冒頭より「六月三十日／木戸一郎／井原退蔵様」までの「發端の部分」を掲載。

秋・文芸一月号、第九卷第十一号・昭和十六年十一月一日發行・48～57頁

翻印状況については、「風の便り」の項を参照のこと。

〔同時代評〕 無署名「読んだものから」(『三田文学』第十六卷第十二号、昭和十六年十二月一日)には、つぎのように記されている。

「文芸」十一月号——ほんの短いものである太宰治の「秋」が興味ふかく読めた。それは、太宰の性格がおぼろげながらもその短篇によつてわかつたやうな気がしたからである。太宰治といふ作家は、こんなことをいふと御本人は不愉快な顔をするかもしれないが、ちやうど牛のやうな人である。といふのは、何も彼が牛のやうにのろまである、といふのでも、また不恰好だといふのでもない。牛は反芻動物である、従つて牛は絶えず食物を食べては吐きだし、そしてまた吐きだしては咽喉へおさめる。あたかもこの牛の反芻の如くに太宰治は彼の言葉や行動を反芻する。自分の行為にたいして何時でも気がかりにしてゐるのである。彼には、多くの作家にみられるやうな無責任な態度がとれないのだ。自分に強い自信をもつてゐながらも、しかも高ぶつた振るまひをすることをきらつて、自己の言葉の一つをさへも気にしてゐなければ気の済まない人であらしい。今度の短篇「秋」ではさういつた彼の性格がはつきりとしめされてゐる。手紙の形式で書かれてゐるが、紙面には作家としての太宰治が自己批判のかたちでさまざまに切りさいなまれてゐる。「君は、二言目には、貧乏、貧乏といつて、悲壯がつてゐるやうだが、エゴの自己防衛でなかつたら幸ひだ」と他人事のやうにいひながら、それは彼自身に向つて問ひかけてゐる言葉である。太宰は彼自身にひそむそのやうな傾向にたいして不正直ではゐられないのである。多くの読者が知る通り、太宰治は決して貧しい家庭に育つた人間ではない、いな彼は東北のある豪家に生れた恵まれたる者である。それにも拘はらず彼はことさらに自分を惨めな者のやうにそして貧しい者のやうに書いてゐることが多い。勿論、創作においては当然そのやうなことは許さるべきことである。而も彼はそのことに關しても平気でゐられないのである。彼は短篇「秋」において、彼みづからにたいして鋭い言葉を与へてゐる。即ち、「君は、ことさら自分を惨めに書く事が好むやうですね。やめるがよい。貯金帳を縁の下に隠してゐるのと同じ心境ですよ」と。——これは太宰の生き方

への反芻である。

他は、「風の便り」の項を参照のこと。

〔付記〕 初出本文末尾の「作者附記。」には、つぎのように記されている。

これは、「風の便り」と「旅信」の續きの部分です。これで完結であります。

初収刊本における「風の便り」の「謹啓。／しばらく御無沙汰して居りました。」以降の終りの部分を掲載。

本年度の文學作品で好かれ惡かれ貴下の關心を惹いたものは何か？・現代文學・十二月号、第四卷第十号・昭和十六年十一月三十日発行・65頁・「アンケート」欄

拙稿「太宰治のアンケート回答」(「太宰治の人と芸術」第五号、昭和五十一年十一月二十日)に、全文紹介した。

『太宰治全集第十卷』(筑摩書房、昭和五十二年二月二十五日)に、全文収載された。

〔付記〕 アンケート回答。「一、著者と題名／二、その理由」の質問に答えたもの。目次には、「昭和十六年の文學作品で何に關心を惹かれたか？」とある。

萬葉集の好きな歌・新潮・十二月号、第三十八年第十二号、通卷四百四十七号・昭和十六年十二月一日発行・48頁

拙稿「太宰治のアンケート回答」(「太宰治の人と芸術」第五号、昭和五十一年十一月二十日)に、全文紹介した。

『太宰治全集第十卷』(筑摩書房、昭和五十二年二月二十五日)に、全文収載された。

〔付記〕 アンケート回答。なお、奥付には、「通卷四百四十三号」とある。

旅信・新潮・十二月号、第三十八年第十二号、通卷四百四十七号・昭和十六年十二月一日発行・79～92頁

翻印状況については、「風の便り」の項を参照のこと。

〔同時代評〕 (A)「文芸・新潮」(「三田文學」第十七卷第一号、昭和十七年一月一日)には、つぎのように記されている。

小説は、太宰治（旅信）長谷健（人情）山男の推理（半田義之）佗日記（上林曉）及び新人木村不二男の「有島供養」である。／新人待望は掛け声だけではなく、既に切実な読者の要求であるが、「有島供養」一篇に限るは、評者は責任を以て無意義を説く。序述は散漫且非感覺的であり、そのテーマはストーリーと共に、大正の遺物である。／其の他の四篇にしても、此れらは最早、文学作品として正当な批判を受ける価値は無いのではないかと疑はれる。中でやく秀れてゐるのは、「旅信」であるが、木戸一郎と井原退蔵が往復させる手紙の巧妙な流れ、その裏には如何なる思想をも発見することは出来ない。手紙でしか自己を表現出来ない二人の不思議な人物は、名前こそもつては居るが、まさしく人間では無くて、タイプなのである。タイプが思想を持たう筈がなく、手紙に現はれた饒舌は機械人間のやうにそれぞれの概念を示し合つてゐる。——で結局これは近來稀な愉快な小説と言ふことになるのかもしれない。

重信常喜「情熱の喪失（文芸時評）」（「赤門文学」第一卷第二号、昭和十七年一月一日）については、「誰」の項を参照のこと。

他は、「風の便り」の項を参照のこと。

〔付記〕 初出本末尾の「作者附記。」には、つぎのように記されている。

これは「風の便り」の續きの部分で、この次に「秋」といふのが續きます。「風の便り」も「秋」も、他の雑誌に掲載されてゐます。

初収刊本における「風の便り」の中間の部分に掲載。

誰・知性・十二月号、第四卷第十二号・昭和十六年十二月一日発行・102頁・「創作」欄

『風の便り』（利根書房、昭和十七年四月十六日）に、全文収載された。

『狂言の神』（三島文庫14）（三島書房、昭和二十二年八月三十日）に、全文収載された。

『太宰治全集第七卷新ハムレット』（八雲書店、昭和二十四年二月二十八日）に、全文収載された。

〔同時代評〕（K）「知性・公論」〔三田文学〕第十七卷第一号、昭和十七年一月一日）には、つぎのように記されている。

創作は太宰治「誰」徳永直「三人」丹羽文雄「実歴史」の三篇である。太宰のは例に依つて例の如きもので自虐と神経異常の要素から成り立つたやうな作品である。近頃の好評にまかして書き捲る此の人のあふなつかしさがそろそろ現れてゐる。遊びが入つて来てゐるのだ。普通人の神経から見れば到底受取れないことがらを書き乍らも妙に読み易くしてゐる、最近のこの人の創作が傑作を生み出す前のうめきのやうなものであれば幸ひである。

重信常喜「情熱の喪失（文芸時評）」〔赤門文学〕第二卷第一号、昭和十七年一月一日）には、つぎのように記されている。

ところで太宰氏の場合である。彼は現実生活の様々な出来事、しかも非常に些細な事件に対する自己の反応を捕へて、自己の本質を見極めやうとしてゐる。どんな小さな感動でも、自分の触覚したままを小説にしようとするのである。しかし自己をそのまま描くことは出来ない。彼は自己を描く場合、自己の可能性を大げさに描くのである。そして太宰氏の小説の面白さは、可能なる自己を設定する彼の身振の大胆さ、率直さに在ると私は思ふ。例へば今月の「知性」の「誰」といふ小説では、主人公は「私は誰だ」と自分に訊ね、自己を悪魔だと大げさに設定するのである。そして先輩の家に行き、先輩から、「ポストにマツチの火を投げ入れて、ポストの郵便物を燃やして喜んでゐた男があつた」といふ話を聞き、これこそ悪魔だと言つて喜び勇んで家に帰るのである。／私が特に太宰氏の小説をここに引用した訳は、それが傑作であるからではなくて、彼の自己を語る態度が明示されてゐるからである。彼は現実生活に於ける自己のどんな些細な反応も見逃さずに之を描かうとするのだが、それをそのまま表現する事が如何に困難で、しかも無効な事をよく知つてゐるのである。だから殊更に自己を惨めに眺めたり、真面目な場合

にふざけてみたり、要するに嘘をつくのである。そして彼の作品の興味は正に彼の嘘のつき方に在るのである。これは一見すれば作者の態度の不真面目さを物語つてゐるやうに見えるが、實際は、自己を語る場合に如何にして自己の可能性を見出すかと言ふことを明かに意識してゐる証拠だと私は思つてゐる。だから彼の嘘とは、要するに彼の想像力である。彼の場合は、この想像力が、いはゆる一つの物語を創り出すことではなくて、告白の形式で自己を物語るのである。だから氏の小説を支えてゐるものは物語性である。そして彼の失敗作といふのは、多くはこの物語性を失つた場合である。例へば今月の「旅」(新潮)は書翰体で、自己の解説であり、「新ハムレット」も「ハムレット」の戯曲を借りて青年の苦悩の解説したにすぎない。解説は如何に巧みでも結局解説にすぎない。／物語は決して単なる思ひつきでない。これは作家の現実に対する夢の結晶である。現実を目を蔽ひ、憐憫も憎悪も感じない者が夢を抱く筈はない。そしてこの夢が立派に結晶するのを忍耐強く待つてゐる事が作家の情熱だと私は言ひたいのである。待つといふ忍耐力を失つた為に、最近の小説が、その最も重要な要素である物語性を失つたのである。私は重ねて言ふが、何もモーパッサン、ゴーゴリ、チエホフ、プーシキン等の短篇小説がすべてであると言ふのではない。ただ彼等の小説の面白さであるその物語にも作者の血と肉とが通つてゐるといふこと、つまり「自己」が立派に語られてゐるといふことを今一度よく考へてみる必要があると思ふからである。

内海伸平「太宰治論」(「赤門文学」第二巻第九号、昭和十七年九月一日)については、「東京八景」の項を参照のこと。

私信・都新聞・第一万九千四百三十七号・昭和十六年十二月二日発行・一面・「文芸」欄の「大波小波」欄

『太宰治全集第十六巻もの思ふ葦(近代文庫23)』(創芸社、昭和二十七年七月一日)に、全文収載された。

〔付記〕 父津島源右衛門の妹雨森たま宛に書かれたもの。

〔追記〕

この稿を草するに際し、つぎの諸氏、諸図書館、諸社の助力を得た。記して深く謝意を表する。青山毅氏、紅野敏郎氏、瀬尾政記氏、関井光男氏、相馬正一氏、津島美知子氏、永富映次郎氏、葦沢謙氏、渡部芳紀氏、大阪府立中之島図書館、国立国会図書館、堺市立図書館、昭和女子大学図書館、天理図書館、東京学芸大学附属図書館、東京大学総合図書館、日本近代文学館、阪急学園池田文庫、法政大学図書館、早稲田大学図書館、映画出版社、実業之日本社、審美社、筑摩書房、中日新聞東京本社、東奥日報社。

## Summary

### A Bird's-Eye View of the Works Composed

by Osamu Dazai

(1941)

Shoshi Yamanouchi

The present collection comprises all of what Osamu Dazai (1909~1948) ever wrote and his utterances recorded at the meeting of joint criticisms of contemporary literary works or round table talks, placing emphasis on recording how these writings and utterances were sent to print.

At the same time, efforts were made to include descriptions of those contemporary magazines, etc. which either printed the late writer's works, or just offered their pages to introduce them in part until the time when they were eventually incorporated in the "Complete Works of Osamu Dazai", this being for the purpose that this edition may possibly help those desiring to make reference to the said "Complete Works" in relation to certain paragraphs or passages in the original writings still in the form of manuscripts.

Space was given also to such criticisms which appeared concerning Dazai's literature, confining them strictly to such portions as directly dealt with the late writer's works.

In "Additional Note", allusion was made to such works of Dazai as fragmentary publication only has so far been made and those which failed to be printed in "The Complete Works". It also includes "notes" and "remarks" related to the works as well as those connected with their first publication and other utterances insofar as they related to the unique literature of Dazai.